



サクラ品種見本園における保護管理

赤祖父 愷 雄

昭和47年、高岡市博労町、加茂農事研究所の加茂善治所長（当時80歳、故人）が永年にわたって国花振興を通じ、国際親善を図ろうとサクラの研究を続けておられましたが、その成果が一段落したのを記念して、県にサクラの苗木123品種、230本を寄付されました。

林業試験場では、その篤志を受けて昭和48年に見本園を設置し、その後も苗木を補充したので、現在は約140種、250本が植栽されています。日本のサクラは12系統、約280品種があるとされますが、当場ではその約半数の品種があり、4月はじめから5月上旬まで次々に花を咲かせます。一番の見ごろは約100品種の花が咲き乱れる、4月20日から30日まででしょう。サクラの花は人々に愛でられ親しまれていますが、美しく咲かせるには、いろいろな保育管理を続けなければなりません。ここでは試験場内のサクラを対象として実施してきた、主な諸害と対策について、保護の面から述べてみます。

1. 病害の対策

サクラは数多い病害菌に感受性が高く、30種以上の病気が知られています。当場内に見本園で発見された主な病害をとりあげ、その防除方法をお知らせします。

(1) てんぐ巣病：サクラの病害として有名です。枝の一部がふくらんでコブ状になり、その先から不定枝がほうき状に多数伸び、次第に大きくなる病気で、病巣からの枝は健全枝よりも早く開葉しますが花はつきません。樹勢が衰弱するので、早い時期での処理が必要です。

防除は病枝の切り取りで十分ですが、枝を切る位置にコツがあり、てんぐ巣の発生源から20～30cm以上はなれた下（幹寄り）の部分で切らないと再発します。切口には直ちに切口保護剤（チオファネートメチル塗布剤とポリオキシシン塗布剤があり、いずれもペースト状。当場では



写真-1. 幹を侵した材質腐朽病（激害症状）

前者を使用，以下切口保護剤と省略する）を塗り，あとからコールタールを重ね塗りして，腐朽菌の侵入防止をします。本病は発病力が弱いとされますが，ソメイヨシノやその近縁種には発生しやすい傾向があります。

(2) 材質腐朽病：本病に対して，サクラは極めて高い感受性があり，枝や幹に病原菌の侵入を受けると木質部の変色が始まり，最後はボロボロになりその部位から折れたり，遂には枯死するにいたります。サクラの寿命が短いといわれるのは，本病が原因であることが多いようです。発病誘因は枝幹の折れや割れ，切り取り，凍傷などのほか，穿孔性害虫であるコスカシバの幼虫が，樹皮下を食害した痕跡も関連します。

腐朽菌の種類は，これまでの調査結果からカワラタケ，ベッコウタケ，シロカイメンタケ，カイガラタケ，

スエヒロタケ，カワウソタケ，コフキタケ，キウロコタケなどであることがわかりました。

防除は変色腐朽した部分を，健全部も若干ふくめて削り取る，枝の一部ならば切取るなどで除去します。切削したあとは切口保護剤を塗り，乾いてからコールタールを重ねる処理をします。腐朽部分を削り取って，幹に大きな孔をあけた場合には，防腐処理後，セメントモルタルを充填すると，傷口の癒合を促進することができます。

2. 虫害の対策

サクラの害虫はかなり多くの種類があり，50種以上はあげられますが，当場内で発見される主要種とその防除方法を説明します。

(1) コスカシバ：サクラの害虫では最も注意を要します。成虫は黒いハチに似た形で透明なハネがあり，枝や幹の樹皮がささくれた部分に産卵します。樹皮下でふ化した幼虫は形成層，木

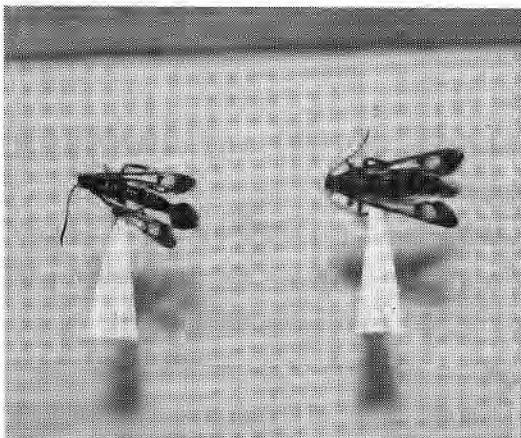


写真-2. コスカシバ成虫

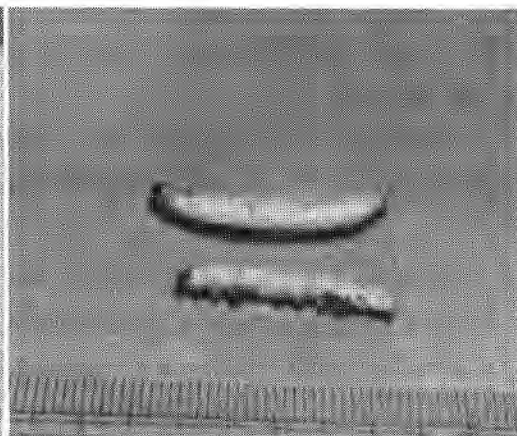


写真-3. コスカシバ幼虫

質部を食害、ウジ虫状の幼虫は老熟すると体長20mmほどに成長し、盛んに茶褐色ゼリー状の樹脂と虫糞を樹皮上に排出しますので、被害の発見は容易です。年1回の発生ですが個体成長差が著しく、羽化は6月から10月にかけてダラダラと続き、幼虫もそれにともなつて、1年中樹皮下に生活していることとなります。加害痕は翌年も産卵場所になり、また枝折れのあとなども本種の被害を受けやすいところです。幼虫に食害された部分からは、胴枯病菌や材質腐朽病菌が侵入し発病、このために樹勢衰退、枯死が occurs。

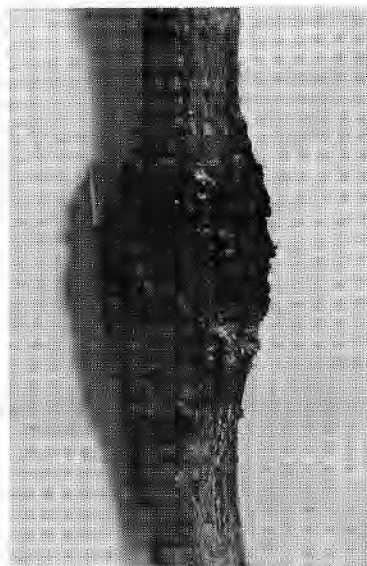


写真-4. コスカシバの被害

防除は被害初期の軽微なうちは、刃物で樹皮を剥ぎ、中の幼虫を捕殺するのが確実です。薬剤防除ではイソキサチオン乳剤100～500倍液を、6月～9月に月2回程度、樹幹散布をすれば高い効果があります。

激害を受けた食害痕は、材質腐朽病を併発していることが多いので、その場合は腐朽菌の防除処理をします。

(2) モンクロシャチホコ：アメリカシロヒトリに間違われやすい加害形態で、梢頭、枝先がとくに丸坊主にされます。幼虫は若齢期赤紫色、のちに紫黒色となり黄白色の長毛を密生。体長50mm、静止すると頭と尾を反らせるので、舟形虫とか尻上虫ともいわれます。ときに大発生しますが、ふつうは単本的発生、7～8月によく発見され、発生初期は1本か2本の枝先に群集しています。本種は土中で蛹越冬、夏に羽化して葉に産卵する年1回の発生です。

防除は初期ならば、幼虫の寄生枝を切り取り、焼くか踏みつぶして処理すれば簡単です。薬剤散布はDEP乳剤1,000倍液が有効ですが、老熟幼虫にはクロルピリホスカサリチオン乳剤を使わないと著効がありません。

(3) ウメシロカイガラムシ：枝や幹がまっ白になって見えるのは、本種の寄生が原因で樹勢にも影響します。こうやく病、すす病を誘発しますので軽視できません。年3回発生、幼虫は5・7・9月に現れます。

防除は堅いブラシでこすり落とすだけでも有効です。薬剤防除は冬季のマシン油乳剤、石灰硫黄合剤濃厚液の散布、夏季にはDMTPかイソキサチオンの1,000倍液を、寄生部位にときどき散布すれば効果があります。

3. 鳥獣害の対策

(1) ウソ：大雪の年には、低山帯、平野部に群をなして飛来し、サクラの花芽を盛んに食害するので花見ができない原因になります。ソメイヨシノや一重咲き品種は激害を受けます。

対策としては、ウソが猛禽類を怖れる習性を利用し、カラスやタカなどの大型鳥類の模型を梢頭に取付けたり、空中に吊り下げると近寄ってこないのが効果があるとされます。

(2) ノウサギ・ノネズミ：大雪になると被害が目立ちます。ノウサギは雪の上から、ノネズミ

は雪の下から枝や幹の樹皮を盛んにかじります。環状剥皮したように食害されると、その部分から上は枯死しますので油断ならない被害です。

対策は、幼齢木ならば幹にワラを巻くか、新聞紙を数枚重ねて巻付けておく有効です。薬剤防除では忌避効果のある、アスファルト乳剤の2倍液を枝幹に塗布する方法があります。ノネズミに対しては、とくに殺虫剤を根元回りに、降雪前にばらまいておけばよいと思います。雪どけ後、枝幹の食害痕を発見したならば、切口保護剤を塗布して、防菌及び癒合の促進処理をしておく必要があります。

4. 気象害の対策

本県のような多雪地では、雪による枝幹の折れ、枝抜け、幹割れ、幹曲り、根返りなどの被害が発生します。これらの予防措置としては、支柱を添えて枝吊りすれば最も確実ですが、そのほかに剪定整枝による枝の疎間、幼齢木に対する、3本支柱を立て縄巻きする八掛け法も有効です。急斜面では幹曲りや根返りをおこしやすいのですが、毎年、雪に押される木には、杭を打って縄がけし、木を引起しておくのが効果があります。

風の被害も雪と似たような症状を呈しますが、枝の疎間や幼齢木に対する支柱立ては、枝幹の折れを予防あるいは軽減することができます。

折損被害部は、切取るか削るかしてから傷口に切口保護剤を塗布、防腐処理をします。また、枝幹の割れにはボルトを通して締めておくと、次第に癒合し樹勢が回復します。



写真-5. ノネズミによる幹の食害痕



写真-6. 雪による被害木

吉峰だより No.6 (昭和59年4月1日発行)
編集発行 富山県林業試験場
〒930-13 富山県中新川郡立山町吉峰
☎ 0764-83-1511